



農林水産大臣賞

「お米は大地の恵み」

埼玉県春日部市立豊春中学校三年

市川才羅

「ソマアー。レルラローロラー。」

祖母の家に遊びに行くと、無邪気な声が聞こえてきた。老人介護ホームに入所しているひいじいちゃんが正月の三日間だけ母の実家に戻ってきたのだ。脳いっ血で倒れてしまつて以来、利き手だった右手の指が変形し、自分で食事するのが難しくなつてしまつた。

「オー、ロリラー。」

僕の名前は忘れてしまつたようだけど、久しぶりに会つたら、よく回らない舌で一生懸命に僕に声を掛けてくれた。どうも、よく来たね、と言つてくれるようだった。

今では、みんなにめんどろを見てもらつてひいじいちゃんだが、今の僕がこうして元気に育つているのは、ひいじいちゃんのお陰でもある。

母の話によると、十四年前、お米が凶作だった年があつたらしい。政府が緊急に米をタイやオーストラリアから輸入し、なんとかその年のお米を補おうとした。僕はその時、ちょうど離乳食を始めたばかりの頃だったそう。その時に

「住んでいる土地の実りをいただかないと丈夫な子に育たないら。」

そう言つて、ひいじいちゃんがわざわざ自分の家の畑で作つて採り立ての野菜や手作りみそと一緒にお米を送つてきてくれた。ひいじいちゃんを送つてくれたお米で作つたおかゆは、僕の一番のお気に入りだった。毎食のように「マンマ、マンマ。」と言つておかゆをせがんだそう。ほんのり甘味があり、ほど良い粘りととろけるようなので越して、いくらでも食べられる。

熱が出て食欲のない時でも、そのおかゆだけはおいしく食べられる。そうとも知らずに僕はいつの間にか、ここまで大きく育つてきた。

「どうしておじいちゃんは目をつぶつて食べているの?。」

僕が小学生の頃、ひいじいちゃんの食べる姿が気になつて聞いたことがある。食事の時にはいつも、一口ご飯を口に入れては、はしをそろえて両手を合わせる。そして親指ではしをはさんだその手をテーブルの上に置きながらご飯をかんでいるのだ。まるで神聖な儀式のようだ。

「大地の恵みに感謝してよくかんで味わつて食べているら。」

その頃は、なるほど、ぐらいにしか思つていなかったけれど、今はようやくその意味が分かるようになってきた。自分が生まれ育つた土地で、雨の日も風の日も、暑い日も毎日様子を見ながら大切に育てて採れたお米に感謝することを。

今、目の前にいるひいじいちゃんはお米作りはもちろんのこと、自分でご飯を口に運ぶこともできなくなつてしまつている。

「おじいちゃん、ご飯だよ。今日は僕が食べさせてあげるね。」

小さめのスプーンに程よく冷ましたおかゆを乗せて口に運んであげた。一口、口に含んであげる度に目をつぶる。

「おじいちゃん、一粒一粒味わつて食べるんだね。」

「レルレーラ、ソマローリラー。」
僕に向かって懸命に何かを訴えている。みるみるうちに泣き顔になつてきている。おいしいご飯を食べさせてもらえることと、大地の恵みに感謝していることを僕に伝えたかったようだ。

今年の新米ができる前にひいじいちゃんは「くなくなつてしまつた。だけど、僕の心にはひいじいちゃんから教えてもらった「一粒一粒のお米に感謝する心」が大切に残されている。そうして今日も、これからもお米が大地の恵みだということ味わいながら、僕はご飯をかみしめていくのだ。